

Title	2014年度『学会賞』選考結果
Sub Title	Award
Author	池谷, のぞみ(Ikeya, Nozomi)
Publisher	三田図書館・情報学会
Publication year	2014
Jtitle	Library and information science No.72 (2014.) ,p.131- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00003152-00000072-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2014 年度『学会賞』選考結果

学会賞選考委員会委員長

池 谷 の ぞ み

三田図書館・情報学会賞は、会誌である Library and Information Science に掲載された優れた論文の著者に与えられる賞です。本年度は 70 号と 71 号に掲載された原著論文 10 編を対象に厳正な審査を行った結果、以下の論文を学会賞として選考いたしました。

汐崎順子

日本の文庫：運営の現状と運営者の意識.

Library and Information Science. 2013, No. 70, p. 25-54.

本論文では、日本独自の私的な児童図書館的な活動である文庫について、その運営の現状および運営者の意識を明らかにすることを目的とした質問紙調査の結果が論じられている。調査では、家庭文庫・地域文庫に対して、地域・場所、蔵書数、運営者の人数・年代・性別・経験年数などの項目からなる質問紙を配布して、528 件の有効回答数を得た。文庫の実態調査についてはいくつかの先行研究が存在するが、本調査は、より最新の状況に関するデータを提供するとともに、活動中の文庫を調査対象として幅広く網羅する努力がなされており、この点でも貴重な研究成果といえる。また、その集計結果は、1993 年に実施された調査の結果と丁寧に比較され、その間の変化を描き出すことにも成功している。さらに文庫活動を支える運営者の意識を自由記述に踏込んで分析することにより、子どもと本に対する愛情が文庫活動を通して強まり、同時に他者とのつながりを通して社会的、公共的な視点から文庫の使命を自覚していく運営者の意識の変遷を浮かび上がらせている。公的な図書館に比べて実態の把握が困難な文庫の状況を、実際の調査に基づいて、その運営者の意識をも含めて明らかにした点は、高く評価されるべきであり、本論文は今後、日本の文庫活動についての典拠文献となることも予想される。一方で、少数の例外を除き、項目間のクロス集計による分析までには踏み込まず、各項目の単純集計に留まっている点、および、自由記述の分析に一定の重きを置いたことによりやや恣意性があるとも受けとられる点に基づき、この論文を批判することは可能かもしれない。しかしながらこれらの点は、日本の文庫の実態を克明に明らかにした本論文の価値を決して低めるものではない。よって、本論文は学会賞の授賞に値すると判断する。

横井慶子

学術雑誌出版状況から見るオープンアクセスジャーナルの進展.

Library and Information Science. 2013, No. 70. p. 143-175.

本論文は、科学・技術・医学分野（STM 分野）の学術雑誌に関する 2011 年時点の状況を定量的に明らかにしたものである。先行研究の問題点を補う方法による 3 種類の調査を実施し、結果として、Ulrichsweb により抽出した 38,803 タイトルのうち、オープンアクセスジャーナルは 5,581 タイトル（約 14%）であること、2000 年以降の創刊誌数全体に占めるオープンアクセスジャーナルの割合は増加傾向にあり、その大部分は Hindawi や Bentham などの新興のオープンアクセス出版社により創刊されていることを明らかにした。さらに、掲載論文数が多く、幅広い領域を対象とし、軽度の査読による迅速な公開等の特徴とする複数のオープンアクセスメガジャーナルが、2011 年以降に相次いで創刊されていることなども明らかになった。既存の複数のリストを照合し、重複データを削除するとともに、一部のタイトルについては個別に確認するなど、緻密な作業によりタイトル数や創刊年等を特定したうえで集計作業を行なっている点で、貴重な成果であるといえる。一方で、出版社や創刊年別の単純集計にとどまっており、今後のオープンアクセスジャーナルのあり方を検討するという目的においては、十分に踏み込んだ議論までには至っていないと指摘することもできる。しかしながら著者も指摘している通り、将来的に同様の方法で調査を定期的に行い、学術雑誌の流通におけるオープンアクセスジャーナルの動向をより的確に把握することの重要性は大きい。本論文は、今後そうした調査を行う上で基礎となるような、オープンアクセスジャーナルの動向を明らかにする上での基本的な枠組みと定量的なデータを提示したという点において、その意義は高く評価されるべきである。よって、本論文は学会賞の授賞に値すると判断する。